

## 私の学生時代

### 一冊のアルバム

高 木 勇

同志社中学、予科、大学を通じての思い出は余りにも多いので本稿では主として中学時代の事を書かせて貰う。

我々が一九三九年中学を卒業する時、記念のアルバムを編纂することとなった。幸いにして今もその一冊が私の手許に残っているが、中学生には少々贅沢過ぎる位立派な出来ばえである。

ではこのアルバムの頁をくりながら夫々の写真にまつわる思い出を辿ってみよう。

先ずワインカラーの表紙を開けると、全ページ一杯にチャペルを写したセピアの素晴らしい写真が現れる。毎朝、我々は彰栄の鐘の音に導かれてこのチャペルに吸込まれて行っ

た。その頃歌った讚美歌は今でも殆んど忘れていないが、それと同じ様にチャペルの中の急角度な天井や梁、ステンドグラスを通して射し込んで来る美しい朝の光、そして重厚な八角型の聖書台等々今も臉の裏にはっきりと憶えている。

さて頁を繰ると穏やかな中にも凛とした校祖新島先生のお写真が載っている。我々は毎朝の礼拝に於て新島先生の直弟子であった堀牧師やその他の諸先輩から目の前に先生のお姿があるかの様な懐かしそうな眼差しで先生の思い出やお教えを繰り返し承っていたのだから難しいことまでは解らないにしても新島先生と言う方は非常に信念の強い方で而も学

生を大変大切にされた偉い先生であったという尊敬の念を強く持っていたのはたしかである。

だがこうした教えの数々は知らず識らずの裡に若い我々の脳裏に浸みこんでいて、後年我々の人生觀の形成に大きな影響を及ぼして行つたと思う。そして何十年か経た今日、新島先生の真の偉大さや先見性と言うものが己れの人生体験に照らして、段々とはっきりとわかってきたように思われる。

続く頁には自署入りの湯浅総長と牧野総長の写真が見られる。

湯浅総長時代に創立六十周年記念の催しが盛大に行われたが、その式典で総長は「良心を手腕に運用する人物たれ」との新島先生の教えについて話されたと記憶している。独得の抑揚とバイブレーションをかかせた総長の名スピーチに当時少年期から青年期へ移行しようとしていた我々は多大の感動を憶えたものである。

また、徳富蘇峯氏、海老名弾正氏、深井英五氏等著名な大先輩の聲咳に接し得たのもこの頃ではなかったかと思う。

牧野総長が登場されたのは中学高年期であ

るが、戦死された令息が中学で一年下であったのでお宅へも時々伺ったし、又、親友の武間君等と共に毎土曜日、日本の子女の教育に一生を捧げられた有名なミズデントンのお宅の昼食会に呼んで戴いたので、ここでも総長から昔の同志社の雰囲気や、新島先生の御人なりなどをよく聞かせて頂いた。その意味では我々は大変恵まれていたと思う。

さて次の頁には、温顔にフロックコートを召した野村仁作中学長の大阪の写真が現れる。元海軍の艦長をしておられた方なので学生達がハイカン先生という尊名を奉っていたが本当に皆から父の様に敬慕されていた立派な方であった。この頃に中学に居た連中は皆ハイカン先生には深い愛着と何らかの個人的



高木 勇氏

な思い出を持っているに違いない。

そのあたりの教葉には懐かしい各教育館の写真が見られる。そして彰栄館の写真の下に中学学生歌が載っている。旧制中学の無い今日ではこの歌も消え去ったのであるうか。

更に頁を繰って行くと、「司級（受持）の先生」と「教えを受けし先生方」という組写真が四、五頁ばかり続く。英語、国語、漢文、数学、歴史、博物、体育などの先生方にも忘れ難い深い御恩と思いがあがるが、中学一年からE.S.S.に入れて頂いたこともあり、英語の先生方には特に御世話になった。先づ基礎は前窪先生とワレン先生から、中級英語は加藤先生と久永先生から、スピーチは黒川先生から、上級英語は柳島先生から夫々熱心な御指導を受けた。柳島先生には英文法をみっちりきたえられたが中学生には勿体ないほど程度の高いものであったと思う。

紙数の関係でこれらの先生方の思い出話をもっと書けないのが残念であるが、ともあれ同志社の先生方は決して知識の切り売り主義ではなく人格的に熱心に温かく我々と交わり教導して下さったことを我々は忘れることができない。やはりそこにも新島先生の感化が

あったのに違いないと今にして思うのである。

いよいよこの辺りから懐かしい友人のグループ写真がたくさん載っている。教室の中やスポーツ、教練、課外活動や夏休み風景等に盛り沢山である。皆幼い顔をしている。純真そのものである。学生が窓から飛び出す写真に「学窓を出でて」と題をつけている茶目気も懐かしい。しかしこのうちかなり多くの方があるいは戦死されあるいは病死されて既にこの世にないことは何とも淋しい限りである。

さてこのアルバムの終末に、当時の名画「舞踏会の手帳」からヒントを得たのか、ちぎれたメモにそれぞれ一言づつ別れの辞を、残している。思い思いに勝手なことを書いているが、一番多く使われている言葉は「彰栄の鐘」「チャペル」「温かい恩師」「懐かしい友人」等であった。やはりこの辺に我々の中学時代の心のふる郷があったことを物語っているのではあるまいか。

（昭和一八年九月大学法学部経済学科卒  
日綿実業株式会社常務取締役）